

発	達	の	ア	ン	バ	ラ	ン	ス											
新版K式発達検査をめぐって													その⑬						
													大谷 多加志						

はじめに

就職してから数年後のこと。K式発達検査講習会の受講希望者が急増した時期がありました。2007年、特別支援教育がスタートした年でした。特別支援教育が画期的だったのは、それまでは学校では支援の必要性が十分に認識されていなかった「発達障害」に光を当てたことです。教育現場にいたわけでもない外野の目線ですが、その当時の「特別支援教育」は希望と活気に満ちたもののように見えました。TEACCHや構造化など、新しい概念が脚光を浴び、発達障害を持つ子どもたちの特性理解と支援方法に関する研修会などが頻繁に開催されました。結果として、「発達障害」の社会的認識は、飛躍的に高まったと思います。K式発達検査講習会の受講希望者が増えたのもこの一環であり、発達アセスメントの重要性についての認識と、そのツールとしての発達検査への関心が高まったためでした。その頃から、微妙に違和感を覚えることばがありました。その一つが「発達のアンバランス」です。あちこちで目にする検査報告書に、二言目には「発達のアンバランスがある」ということばが出てくるような印象を持ったのです。もちろん、領域ごとの結果に大きな差がある場合など、合理的な解釈と思えるものが大半です。しかし、「領

域間には差はないが、領域内で見ると発達のアンバランスが・・・」、「領域間、領域内のいずれも差はないが、反応の傾向を見ると発達のアンバランスが・・・」など、半ば発達にアンバランスがあることを前提としたような報告書を目にすることもあり、何となく違和感を覚えました。今回は、この「発達のアンバランス」ということばをテーマに考えてみたいと思います。

発達のアンバランス

発達障害とは何でしょうか。自閉スペクトラム症という診断名の「スペクトラム(連続体)」が示すように、その状態像は様々であり、特定の状態像を提示するのは不可能であるように思います。一方で、「発達障害」について一定の共通イメージは形成されてきているようにも思います。医学的な診断基準はひとまずおくとして、身近な感覚として理解しやすいのは、コミュニケーションや対人関係、想像力、感覚などに困難さを持つという点でしょうか。例えば「言葉は流暢に扱うが、一方的で会話がうまく成立しない」という事態はコミュニケーションの問題と考えられますし、「同じ手順を踏まないと納得できない。こだわりがある」とか「それが守られないとパニックを起こ

す」という事態は想像力の障害によるもの
と考えることができます。このような状態
像を指して「発達のアンバランス」という
ことばが用いられているように思います。

杉山(2011)は、発達障害について「発
達凸凹」ということばを用いて説明してい
ます。「発達障害＝発達凸凹＋適応障害」で
あると捉え、発達凸凹が生活上の困難につ
ながっている場合に、「発達障害」として支
援の対象とするべきであるとしています。
これは①発達障害の状態像が様々であり、
②生活上の困難の程度と特性の強弱は必ず
しも比例しないことを考慮し、③支援の必
要性によって発達障害の診断を行うという
考え方に基づいています。この発達凸凹の
考え方は興味深いものですし、発達の凹凸
つまり「発達のアンバランス」が発達障害
の大きな特徴であると考えられていること
の1つの表れとも言えるでしょう。

知能検査における「アンバランス」

一方、知能検査で用いられる用語に「デ
ィスクレパンシー」ということばがありま
す。これは日本語では「不一致」を意味す
ることばで、個人の持つ知的能力(例えば、
言語を扱う知的能力や、パズルなど空間的
な操作に関わる知的能力など)の間に明確
な差がある場合、能力間に「ディスクレパ
ンシー」がある、ということが検査結果か
ら示されます。

少し脇道に逸れますが、このとき何をも
って「明確な差」と言うかという、
それは統計学的な基準によって示されます。
例を挙げてみます。ある中学生が、学校の

試験で数学は50点、英語は75点という結
果だったとします。さて、この中学生の数
学の学力と、英語の学力に差があると言え
るでしょうか？

実は今示した情報だけでは判断ができま
せん。一見すると、点数は英語の方がよい
ので英語の学力の方が高いと思えるかもし
れませんが、しかし、もし平均点が数学は30
点、英語は80点だったとしたら、どうで
しょうか。数学は平均点以上、英語は平均点
以下の結果になり、評価が逆転してしま
います。そのため、実際には各教科の偏差値
(順位)を比較します。偏差値は、順位が
ちょうど中間(100人中なら50番)なら
50になります。さて、では偏差値で比較し
て数学は45、英語は60であったら、どう
でしょう。数学と英語の学力に差がある
と言えるでしょうか？偏差値が15も違いま
すので、差があるような気がします。それ
では45と55だったら？あるいは45と50
だったら？どのくらい数値が違えば、差が
あると言えるのでしょうか。このとき、統
計学の考えでは、ひとまず数学と英語の学
力に差がないと仮定し(これを帰無仮説と
言います)、偶然で偏差値45と60という結
果になる確率を考えます。そして、偶然で
その結果が生じる可能性がある水準以下の
場合、統計学的に差がある(有意差がある)
と言うのです。

話を戻します。知能検査の「ディスクレ
パンシー」も同様に、測定した能力の種
類ごとに偏差値のような数値を算出し、その
数値を比較することによって能力間に差が
あるかどうかを判断します。特別支援教育
が始まった当初、この「ディスクレパンシ
ー」に注目が集まりました。知能検査の「デ

「ディスクレパンシー」は、主に情報処理過程に関わる能力間の差を示すものでしたが、例えば自閉症の子どもの場合、聴覚的・言語的な情報処理より、視覚的な情報処理に優れる傾向があります。知能検査の結果で、視覚情報処理>聴覚情報処理という結果が示されれば、視覚支援が有効であるなど、支援の方針や手立てを示す根拠にもなります。

ここに、最初に述べた「発達のアンバランス」ということばへの違和感の原因があるように思います。発達障害の方には、発達凸凹(発達のアンバランス)があります。また、情報処理過程にも得意・不得意があることが多いため、知能検査の結果で何らかの「ディスクレパンシー」が示されることも少なくないでしょう。しかし、知能検査は、発達障害の特徴であるコミュニケーションや対人関係、想像力、感覚の問題などを直接的に評価するものではありません。つまり、コミュニケーションや対人関係、想像力、感覚などの問題を持つ人であっても、知能検査で評価されるような情報処理過程には特に偏りはないという場合もあるはずですが、発達障害であれば、知能検査や発達検査の結果にも必ずアンバランス(ディスクレパンシー)があるはず、という考えが暗に感じられること。これが違和感の正体のように思いました。

発達検査における「アンバランス」

K式発達検査の講習会においても、「領域間でどのくらい指数が違えば、有意差があると言えるか」、「プロフィールの凹凸がど

のくらいあれば、アンバランスだと言えるか」というご質問をよく受けます。しかし、K式発達検査に関して言えば、検査法上は「ディスクレパンシー」を示す基準はありません。先に述べたように、検査法上の「ディスクレパンシー」は統計的な根拠によって示されるものです。K式発達検査の場合は、特にそのような統計的な差を示す基準を作っていないのです。

ここまで、「発達のアンバランス」ということばに対して、やや批判的なことを述べてきたように聞こえるかもしれませんが、発達障害の特徴に「発達のアンバランス」があること自体は間違いありませんし、どのようなアンバランスがあるのかをアセスメントしておくことは非常に重要です。ただ思っているのは、知能検査や発達検査を使う時に、これほどまで「アンバランス」ととらわれなくてもよいのではないかと、ということです。数値に差があっても無くても、どうしてそのような結果になったのかを考えることができればそれでよくて、むしろ「アンバランスがあります」で何となく落としどころを作ってしまうと、それ以上の深さの検討を止めてしまうことになりはしないかと思うのです。

船曳・廣瀬・川岸・大下・田村・福島・小川・伊藤・吉川・村井(2013)は、自閉症スペクトラムの様々な特性の程度について多面的に評価するためのツールであるMSPA(multi-dimensional scale for PDD and ADHD)を開発していますが、その中ではMSPAで自閉症の特性について評価し、ベースとなる知的、発達の水準は別の検査で評価するという形式を用いています。発達検査を実施したからといって、その子ど

もの発達のあらゆる側面について、全て理解したり、何かを言い切ったりする必要はないのです。ただ、目の前の子どもの行動、反応をよく観察し、その背景について思いを巡らせ、できるものなら何か役に立つことを1つでも見出す。そういうことができる検査者でありたいと思っています。

引用文献

- 船曳康子・廣瀬公人・川岸久也・大下顕・田村綾菜・福島美和・小川詩乃・伊藤祐康・吉川左紀子・村井俊哉 (2013) 発達障害者の特性理解用レーダーチャートの(MSPA)の作成、及び信頼性の検討 児童精神医学とその近接領域. 54(1), 14-26.
- 杉山登志郎 (2011) 発達障害のいま 講談社現代新書.

バックナンバー

- 第10号 発達検査でわかること
- 第11号 通過・不通過
- 第12号 解釈・見立て・所見
- 第13号 検査手続き
- 第14号 導入
- 第15号 発達検査でわかること②
- 第16号 発達検査のもつイメージ
- 第17号 発達心理学用語講座 (K式編)
- 第18号 発達心理学用語講座 (K式編②)
- 第19号 行動の発達の意味と機能
- 第20号 K式をめぐる私ごと
- 第21号 改訂に向けて
- 第23号 発達相談①